

七月

柴田康弘

海を渡る鳥たちが

青空の隘路に迷い込み

眠りの水底を逃げまどう

イワシの群れ

七月の濃い緑の地滑りのように

テーブルの上で友との会話が乱れ

崩れ始める

地面をたたきつける

夕立に逆らい

天に向かつて噴き上がろうとする水のいのち

まもなく

青いインク瓶の中で

長い雨季が終わろうとしている

月のひかりに浸されて

いつの間にか

読みかけの書物のうえを

未知の潮がひろがっていく

座礁した船の吃水線を横目に

ぼくたちは

深夜の高速道路を疾走し

どこまでも続くトンネルのような夏に

突入していった